

研究発表

新古今時代における玉葉・風雅歌風の前兆

——建礼門院右京大夫を中心として——

Foreshadowings of the Gyokuyō-Fūga poetic style in the age of the Shinkokinshū: Kenreimon-in Ukyō no Daibu.

フィリップ・ハリス[※]

Abstract

The poetry of Kenreimon-in Ukyō no Daibu (c.1155—c. 1233) is remarkable in the so little of it seems to fit the dominant styles of her age, styles that may be collectively called the Shinkokin style. Much of her poetry, and usually her best, seems closer to styles that are typical of the fourteenth century anthologies, the *Gyokuyōshū* and *Fūgashū*. It thus appears that she may be something of a pioneer in poetic development, perhaps introducing new styles over a hundred years before they became common and showing the way in which poetic style was to change. However, a search through the poetry of some of her famous contemporaries reveals that they too on occasion wrote poems that fit well with the Gyokuyō-Fūga style; and one is led to conclude that many aspects of the “new style” were well established in

※ Phillip Harries [現職] スタンフォード大学助教授、東京大学客員研究員

the age of the *Shin-kokinshū*, and suggestions of it may be found even earlier.

It is true of most styles of Japanese court poetry that they were practised by many poets long before they became the norms of an age. Sometimes such poets were innovators, sometimes they were experimenting with new styles that they could not be said to have introduced. Ukyō no Daibu can hardly be called innovative, for she did not originate the styles she used. However, she does use expressions rarely or never found in previous poetry; her poems contain a relatively large proportion that are close to the Gyokuyō-Fūga style; and she does show a predilection for that style, while her contemporaries on the whole do not. It seems reasonable to consider her at least a precursor of the later Kyōgoku-Reizei poets.

この試論は、歌風の変遷発達過程と特定の歌人との関係という広範な問題の序論にしか過ぎない。筆者がこの問題に興味を抱いたのは建礼門院右京大夫（以下、右京大夫と略称する）の歌の評価を試みていた際のことである。右京大夫集の集中的研究に取り組むまでは、そこには典型的な新古今時代の歌が多く収録されているものと予想していた。しかし、この予想は完全に裏切られ、千載集や新古今集の歌風を持った歌は異常なまでに少ないという事実が判明したのである。

右京大夫の歌の多くは、宮廷の通常の歌風、つまり手紙などに用いられていた歌風を持っている。この歌風は三代集の歌風に類似しており、アメリカ

の日本文学研究家、ロバート・ブラウナー、アール・マイナー両氏が、「藤原歌風」と呼んでいるものである。この藤原歌風の歌を詠んだ右京大夫という歌人は、有能な歌人ではあるが、卓越した歌才の持ち主とは言い難いように思われる。なお、藤原歌風は、新古今歌風や玉葉風雅歌風とは異なるということとは論をまたない。

新古今集の歌風の特徴は、簡単に言えば、幽玄と余情妖艶であり、またそこに収録されている和歌は、象徴的叙景歌の性質を帯びていると同時に、現実からの空想的逃避とも考えられる自然観照の色彩を濃厚に持っている。恋歌や述懐歌などでは、感情の直截な表現は避けられ、物語的情趣に彩られた人生観照の叙情歌に近いものとなっている。修辞技巧的には、新古今歌風の特徴は、流麗で洗練された表現、本歌取、一句切、三句切、体言止めなどである。

ここで、右京大夫の歌の内、新古今歌風に完全に合致している例の一つ挙げてみたい。

橘の花こそいとどかほるなれ風まぜにふる雨のゆふぐれ。

右京大夫集80

この歌は、余情妖艶の特質を持った歌であり、また、三句切、体言止めの技巧が用いられていることとも注目し得る。しかし、右京大夫が体言止めの技巧を用いている例は極めて稀であり、更に、この例と同様な新古今歌風を持った歌の例を、その歌集の中に見出すことは殆ど不可能である。右京大夫の歌の大部分はさほど優れたものではないが、玉葉集や風雅集の和歌を連想させる卓出したものも多い。勅撰集に収録されている右京大夫の23首の歌の内、16もの歌が玉葉集と風雅集に見出され、千載集や新古今集に収録されているものは皆無であるということは、偶然の一致ではないようである。

右京大夫の歌風が真に玉葉風雅歌風に合致しているものであるかどうかを知るためには、玉葉風雅歌風の特徴の概要を述べ、右京大夫の歌のいくつかを厳密に調べてみる必要がある。

この歌風の特徴は、緻密で徹底的な自然観照と、自然現象の周密な観察である。特に後者は、強い写実性を生み、妖艶の色彩を排除する傾向がある。この写実性はまた、強い内省と予期せぬ心理的真実の発見という形で恋歌にも認められるものである。玉葉集と風雅集には、イメージのみから成り立っている自然を歌った歌と、イメージを一切含んでいない恋歌が多く収録されている。また、両者の歌風の特徴は、洗練された新古今歌風とは対照的な、極度の平易平明さ、時には非詩歌的とさえ思える程の平凡さである。また、修辞技巧に見れば、同一語と同一音の反復使用、字余り、特異表現の頻用などである。

この時代には、万葉集が高く評価され、高度に洗練された技巧を用いることなしに純粹な感情を直截簡潔に表現する場合の模範と見做されていたようである。次の為兼卿和歌抄からの一節は、玉葉風雅歌風の特徴の多くを語っているように思われる。

万葉の頃は、心の起る所のままに、同じ事ふたびいはるをも憚らず、
藝晴^{けはれ}れなく、歌詞・ただのこと葉ともいはず、心の起るに随ひて、ほし
きままに云ひ出たせり。

この為兼の所説は、右京大夫の歌が、平易平明、反復的、自己中心的、内省的、直截的であることから判断すれば、右京大夫の歌の多くに適用され得ると思われる。

右京大夫の歌風を例証するに際して、右京大夫と同時代の歌人俊成女の新古今歌風を持った歌も挙げ、両者を比較してみたい。両者の主題は、恋の追憶と悲哀である。

忘れむと思ひても又たちかへりなごりなからんことぞかなしき。

右京大夫集226

露はらふ寝覚めは秋の昔にて見果てぬ夢に残る面影 新古今集1326

俊成女の歌は余情妖艶の典型であり、イメージを豊富に含み、微妙な非現実感を醸し出している。作者そのものはイメージの背後に消滅しているよう

な印象を与える。これとは対照的に、右京大夫の歌は、作者そのものが歌の中心に顕在し、イメージを用いず心理状態を直截に表現し、その言葉は平易平明で、非韻律的でさえある。また、その歌は、極めて主観的であり、感情が変化するとその瞬間を精密に観察し、微妙な心理状態を歌い分けている。同じ様な特質が玉葉集に収録されている従三位親子の次の歌にも認められる。

日頃よりうきをもうしとえぞいはぬげに思はずもなるかと思へば

玉葉集1702

この歌の修辞技巧に関しては、平明な言葉の使用、「うし」「思ふ」の反復使用、非韻律性などに注目せざるを得ない。また、風雅集に収録されている永福門院の次の歌もこの範疇に入る。

今日はもし人もや我を思ひ出づる我も常より人の恋しき。風雅集1223

ここで、これら二首の歌の特質に類似した特質を持つ右京大夫の歌を挙げてみたい。なお、最後に挙げた歌は、同一語の反復使用の極端な例である。

とにかくに心をさらず思ふこともさてもと思へばさらにこそ思へ。68
よしさらばさてもやまばやと思ふより心よわさのまたまさるかな。120
をなじ世と猶おもふこそかなしけれあるがあるにもあらぬこの世に

右京大夫集217 風雅集1997

思ふことを思ひやるにぞ思ひくたく思ひにそへていとどかなしき。

右京大夫集218

これら四首の歌はすべて玉葉風雅歌風の特徴を有し、新古今歌風の歌とは確かに異なっていることは明らかであろう。なおこれらの歌には——右京大夫の歌一般についても言えることであるが——字余りが頻用されていることにも注目しておきたい。

右京大夫の歌の特徴として、更にもう一つの特徴、つまり、玉葉風雅歌風に通ずる新しい表現の使用という特徴を挙げなければならない。岩佐美代子氏は「玉葉風雅表現の特異性」という論文の中で玉葉集及び風雅集に収録されている十二世紀後半の歌人のうち、新しいあるいは特異な表現の使用率の

最も高い歌人は右京大夫であるという事実を明示している。筆者自身の調査によれば、これら二つの勅撰集に収録されている右京大夫の歌の多くは、同時代の歌人の歌には見当たらない、右京大夫独特の句を含んでいるようである。その例は、右京大夫の傑作の1つである次の歌の上の句に見出される。

夕日移る梢の色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな。

右京大夫集61

「夕日」「梢」及び天候の暗転の瞬間の描写は、玉葉風雅歌風の特徴を示すものである。「夕日移る」という句は、風雅集に収録されている為兼の次の歌にも見出され、為兼は、その句を自然の精密な観察を示唆する句として採用している。

夕日移る柳の末の秋風にそなたのかりのこゑもさびしき。 風雅集532
右京大夫の新しい特異な表現の例を更にもう1つ挙げてみたい。

くらき雨の窓うつ音にねざめして人の思ひを思ひこそやれ。

右京大夫集334

第一句及び第二句は、新しい特異な表現であるばかりでなく、情調の面で、玉葉風雅歌風に極めて近いものである。

これら特異な句の使用は、優れた歌や玉葉風雅歌風を彷彿させる歌に限定されているのではなく、右京大夫の歌全般について認められる特徴の1つと言えよう。右京大夫と同時代の歌人も新しい表現を用いたことは確かではあるがその使用目的はしばしば玉葉風雅歌風というよりむしろ妖艶の情調を醸し出すためであり、また、その使用頻度は、右京大夫や京極派の歌人より低いものである。結論的には、右京大夫の最も優れた歌の多くは、玉葉風雅歌風を持っていると言えよう。

しかし、この事実を認めたとすると、右京大夫の和歌史に於ける地位が問題になる。右京大夫に、和歌の刷新者あるいは先駆者としての地位を与えるべきであろうか。答は否である。その理由としては、玉葉集に収録されている右京大夫と同時代の歌人の歌の多少は、玉葉風雅歌風を持っているという

事実が挙げられよう。次に挙げる、右京大夫と同時代の二人の歌人——藤原定家と式子内親王——の歌は、平易平明な言葉、イメージの排除、感情の直截な表現、特異な表現などがその特質となっている。

忍ぶとも恋ふともしらぬつれなさに我のみいくよ歎きてかねむ。

玉葉集1336

あはれともいはざらめやと思ひつつ我のみ知りし世を恋ふるかな

式子内親王集748

これらの特質は他の右京大夫と同時代の歌人の歌にも認められるので、玉葉風雅歌風の特質を持った歌を詠んだのは右京大夫のみではないということになる。

また、これらの特質を持った歌は、新古今時代以前にも存在した。例えば、和泉式部の歌の内には、これらの特質を持ったものもある。

いさやまたかはるも知らず今こそは人の心をみてもならはめ

玉葉集1683

以上の事実から判断すると右京大夫に和歌の刷新者あるいは先駆者という地位を与えることは、当を欠くことであると言えよう。

玉葉風雅歌風は、すでに新古今時代に発展しつつあったが、この歌風の当時の主要な体现者であり、また、後世に於けるこの歌風の完成の前兆的存在であったのは、右京大夫と考えられる。その理由は、次の2つに要約されよう。(1)右京大夫と同時代の歌人も、玉葉風雅歌風の特質を持った歌を詠んだことは事実であるが、それらの特質はあくまで特質の「要素」であって、真の玉葉風雅歌風を持った京極派の歌の特質とは多少かけ離れている。これに対して、右京大夫の歌の特質は、真の玉葉風雅歌風の特質に近いと判断できる。(2)いわゆる藤原歌風で詠まれた駄作は問題外として、右京大夫の優れた歌の大部分は、玉葉風雅歌風を持っている。

刷新者あるいは先駆者と、前触れのあるいは前兆的存在とを区別するということとは、とりもなおさず、歌風の変遷発達過程という微妙かつ困難な問題

を扱うということである。歌風の変遷発達は極めて遅々としたものであり、ある1つの歌風が、ある特定の時代に確立した歌風として容認されるためには、それまでに多くの歌人がその体现者であることが必要である。1人の歌人を刷新者と特定することは困難であろう。

右京大夫を玉葉風雅歌風の先駆者として位置づけることは、これまでに述べたことや、詠んだ歌の数が比較的少なかったことや、当時は無名に近く、他の歌人に影響力は皆無に等しかったことなどから判断して、まず不可能と言えようが、少なくとも、この歌風の前触れのあるいは前兆的存在であったと結論づけることは可能であろう。

討議要旨

位藤邦生氏（広島大学講師）から、発表者の論は、式子など新古今時代の歌人が歌会等で詠んだ晴の歌でなく、建礼門院右京大夫集という日記的性格をもった歌集の歌——いってみれば褻の歌——が、偶然、後の京極歌風といわれるものと一致していた、というところに論点をおいているが、しかし、一致していたか否かということのほかになぜ一致していたのか、という理由を論じることも必要ではないか、という質問があり、発表者から、新古今時代は非現実的な傾向が認められるが、右京大夫は源平の戦いに直接向わなければならない状況にあったので、そういう非現実的な歌に向わず、玉葉風雅の歌風に自らなっていたのであろうという返答があった。